



花のけしき
のふし
証

海内一本
月池書屋愛玩

洋学文庫
文庫8
J170



水はゆた

水

はたし雲城跡少ナリ

まふみ陰城多知社_日見_日ハ

とふ田河のほろ子まふおする者

そよ川上乃む_サあり_クニ_ヌヤ_クハ

秘
今日初見におもひのりし
て
茶
茶
茶
茶
茶
茶
茶
茶
茶
茶

爛漫老人書以換序 (良)



花のかけゆきの品評

一 花のかけゆきの品評
白鳥堤に啼く鳥と下干左月立の春景を凡と見
子隅田川字野と後波も宣流て氣れまゆの水鏡中を
う帆影もとこまの糸の芳も高く浮てかための一二三四
うきぬのさよめゆれんもさるるらんれんもて遊とて字が
酒にほろ蒨麻の撥あゆむ大七ヤード陸と河の差別
をいふ糸と風雅をこころませし都の毎茶いんか
を中より向より來かゝる男年の花二十と四の表侍が
袴もも大ナルれと教訓者もさるる懐い書藉二三冊を入

きつとてたがむ物ありしに沈むる神を首をくれば
獨り言つ時天下泰平今も昔も久しかり必し命れ
わつとて人一人が必し命を捨てる事あるにあらざるをそ
物にせむるをかんれば味まうて事なり故にそがわねば
そりりあひとれ中不亂有方者無色有包者無人全有包
者無字。其變を伝有包不足男がよくて令持て女子
があるればかんで廊が毎あるにそいで片むむかむふ
ら大智と事を入つと女の惚るをありて粹で浮せが
流るを人生活と十年正しくことあらまらるがまよ
よるやせりかまうわりのぬるまよるねま志みと見ゆれ
とそは書せり勉強の事と教をうとるんをわつと今

けぎの包よりいふれて我と云れ天竺の人の性
總動きなりん

○ 甲二三の男はつちやう肥て色白で唐棧の石物とて
竹多れ者七子のけんびく小紋の羽織をわきの雲
で二人の礼何いそ作りがまろ弱足まゆく是は在者
とるるきり竹海のまを呼ぶかたへ

○ 中人あり、私を教あり、よりあり、三人まれば所人
とるねとす、小さまを包果もかりかり、
あせ風、こまをよとて、極がたど人柄、くりの、まを
落る者、之り、教やて、かたおるれを、
[田]、嘆きと、おろちり

とていざうらぐいそをばつらぐいゆく後の首をそへ
是れもぶらぐいゆきりぬる因アノ子流きんたてをとおしよ
アノ流きんの首をまきとるいゝ意気せりあつてやさしくつて
そと持物まをかせよふそのかたを男だともいふたよ
のうけてまきとるいゝがきうでいゝもあるがまきとる
いゝまきとるいゝのうけはまきとるいゝをまきとるいゝ
あんまりきりぬるいゝつてやさしくとおしよるいゝ
はまきとるいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ
なまらつていゝぶらぐいぬるいゝのうけはまきとるいゝ
因おやおよぬるいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ
いゝともなまらつていゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ
自らか懐おほやまきとるいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ

○
おやりならぬまきとるいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ
トけあつていゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ
皆ていゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ

ラがうらぐいゆきりぬるいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ
アノ子流きんたてをとおしよるいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ
いゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ
かきおほやまきとるいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ
半信おのまきとるいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ
大カステラかのおほやまきとるいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ
腹をたつて朝から晩までいゝのうけはまきとるいゝのうけはまきとるいゝ

出葉たり一葉年の積古日月も計りぬのちに中丸あり
古丸は、倒の人か寝つてあつたらちる羽をのむして
あつてひききんどのそねへ^又又カステラの積を詰のら
ふらふらも^又又年つ折るふぞゆき、ほろは是れ^又又
れ過人々も、化物れ多か^又又

○ 依りて一まがら酔まがら十七八の丁積上あり
あり一野而と供ふらふと其まの連ゆりの
中まらあつらて困ておれぬまら^又又
こらをあらふら^又又
人まら^又又
ゆつてわら^又又

てまらあつまや、しりぬをれと市やのふを^又又
向ふ、海つておのりの二葉^又又
き^又又

○ 恒とあいまら^又又
あり恒と^又又
帯のより^又又
連れ^又又
イキハルト^又又
といく是は西洋家^又又

○ 二葉積の言も^又又

こゝもその切縁あり。長大小の能くどりまぐん
のね子よそゆきくの影造りからみなり。外山の
やまのね子のきり。さうして見るとよきうの様ア、
ナニカニツパツターゆりゆりのそとでや子ハあまじい
おしめきふニおきさ拍子まゆくこれにせを國が
初まりしとまろくまろべー

○ 十二がりの男の子黒の羽織ハ八丈半の少袖ハ服
履一平側ニ付きとむら。祖又をこしてつむぎの
紋ハツチ履も志より。腰歌を下ケ。下杖とて持添
て。ゆき。ま。い。ち。や。此。ゆ。り。ゆ。り。あ。ぶ。な。ん。
その中。を。ゆ。り。ま。れ。よ。老。後。の。ホ。み。他。綴。あ。る。ま。

あ。ろ。り。伏。ス。ア。十。も。ろ。う。こ。ぬ。り

○ 十五六をかりらと。十二三の新造。字ハ九人
ソレもろく。な。流。新。造。取。り。ひ。の。好。も。ま。ま。ろ。う。
す。れ。け。を。い。は。し。御。編。細。膝。下。と。取。草
だり。志。及。伏。の。も。抵。を。頭。を。包。こ。又。も。ち。ま。ま。ま。ろ。り。
あり。肩。こ。け。た。つ。も。あり。右。一。ゆ。ゆ。を。取。り。その。ま。
年。ま。え。り。ス。ア。か。梓。の。二。年。跡。ニ。木。の。機。を。坊。キ
流。文。ハ。ハ。サ。サ。ハ。長。包。の。坊。つ。是。こ。に。化。務。を。具。
と。して。たり。野。市。ハ。人。ろ。ろ。り。新。造。深。ひ。て。木。母。ま。の。カ
ゆ。く。是。ハ。在。何。の。常。年。取。り。わ。か。る。べ。ー

〇 女乞食之をうりの子は向つた破れし一管筆をこい
 ちりたるまに清原のむかきうとをこいこい
 けさゆく又人のえ、あしや一矢ひきりらあひきり
 一丈おやうをせんだんふん云い腰あおをら
 破れこらもをまもしたつ赤キ乞食抱き也也
 その傍に深くあひのこわらうては半ば肩をさる
 五つも持た言言を腰をかかふる其の
 金限にえーからあ廓がむこきおをやらーお
 せつうまおれみくれおのりあ母のそーり
 ことおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 おりあかりを路こきの能とかならうつ供う

人れ浮世がむらて だらけ 糊にう困りしを、おりのあお
 女にわめがられー人れおのゆくまをうらたの
 ぶらぶらーきよのいお
 けさるあらうしちたを
 先賢人

慶應二年 丙寅

二月

竹久のそら

茶屋の娘をなす

○ 本母のあまをりけはあありと多うとせうとあうとく
十二と四より七ハ年すとの女おあのみも皆こひ
ほくらのあま今あきんごくを附けあうかんごくを
さしおるゆりゆりをささくわら目かきやういじ
にまやうまひせまふ折こり柏るホカカクとい
等くや否や 彼方ハ方上甚し戯れあう四章十
人た子供あう一あまよりつひ幼きを先陣
と 割上るを後陣と三行をなす
る神里出ん年きけしる男様の陰あま居
る子供の殺をさくおさう又カチくと柏る本
をさく南乃方と進み外けを結ま

後く希者持ふふそれる隊伍を乱さば徳の孫
武あり是王宮より美人は花軍を破り其
あつてまと思ひ出るも大に戸乃町を名する
も習師匠乃軍破る人

○ ほか二人高をわかれ声く矢を射り如く駆け
けしははくあうて馬上の侍は騎博の侍里羅
沙乃初織其小乃名は馬の足と早今れ其
見るとあまうつくはあまをさすやあ後
とさうや神と知れあまやあま女あま
ああおあま(あま)これあまを解けくあま
くあまあま(あま)あま実意をさあ

を別々わいのこそありけり

○と何る小宗極みうを多敷ききたる
小宗此にむれ木のちより後少んゆるこ
胃女え免やう小おらなふと堤を
故後ふりたる物言ぬをよと
立まふりたる詠えのあるやらん
ははそとこ河とこや問まは

○いさふも秀氣丸少き小半竹も何れ
あろ三回り此控のり小船はふき上り
来りしは古何り十二三はうりたる若此
行小引はこをそり合部小何るを
親影此見たる中もあ何り姫何り
婢僕も小僅小六人牛此あすを控おえ
白雉あそ多往はそあみ徐う小
立中と多を沂小澄一舞雩小風

吾人と同じ心地不_レ足_レふけり懽_レ鯨
漸々光りを何_レも_レ舟中燈を点_レる
あろ元の棧橋へ下り_レ芝居の_レ籠_レ
早けき_レ二椀_レ櫓_レ押さ_レせ花の
さりと_レ籠_レ此人の_レうり_レ地_レ情_レ
を_レ考_レ月を載_レて_レ悔_レま_レや_レ
越向_レと_レ多_レる_レ水_レつ_レは_レ
妻_レ具_レなる_レ原_レ

う_レる_レ文_レう_レる_レか_レぬ_レ
い_レる_レた_レる_レは_レさ_レ
よ_レる_レる_レよ_レま_レぬ_レ
此_レの_レ極_レの_レ言_レ
此_レの_レ言_レ
う_レる_レる_レる_レる_レ

道生_レの_レ言_レ
意_レ
と_レち_レあ_レら_レ徳

